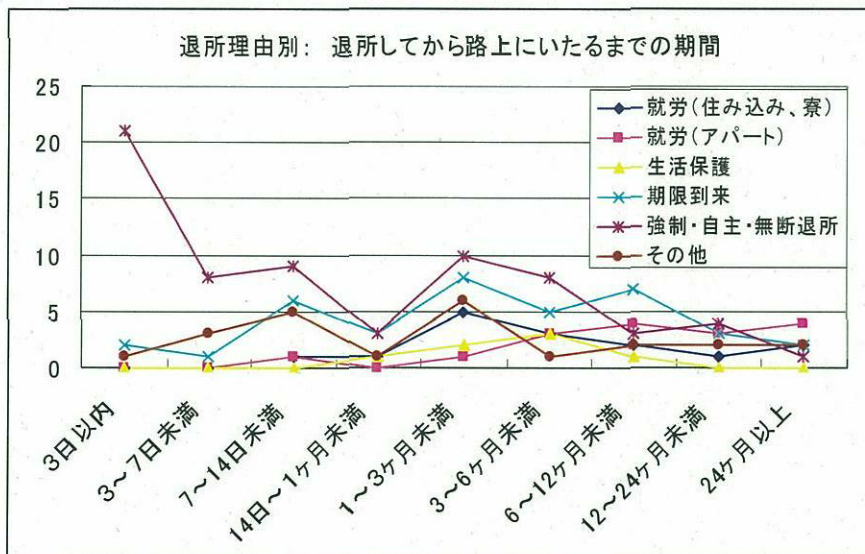


意外なのは、期限到来による退所者の路上にいたるまでの期間である。強制や自主退所は明らかに即路上の人が多く、期限到来の人は少ない。これは、自立支援センターを期限到来で退所した人は、入所期間中に一定期間就労に従事したこと等があり、これらにより少額の蓄えができたからと推測できるが、はっきりとした理由は不明である。



退所から路上に戻るまでの期間(問26\_1):退所理由別

	n	平均(月数)	標準偏差	最小	最大(月数)
就労(住み込み、寮)	16	15	7.62	12.73	10日間
就労(アパート)	17	16	15.22	17.73	15日間
生活保護	9	7	2.81	2.53	20日間
期限到来	43	37	5.32	10.47	1日間
強制・自主・無断退所	74	67	2.12	4.12	1日間
その他	24	23	5.34	10.90	1日間

【考察】

- ① 路上生活者の 9%にあたる自立支援センター経験者(再路上者)のうち、64%は、自立支援センターから直接路上に戻ったケースであり、就労(18%)や福祉(5%)を通してから路上に戻ったケースは少ない。就労や福祉が継続されていれば、路上に戻らない(成功例)と考えられるので、退所時の退所理由の内訳と整合性がとれている。
- ② サンプル数は少ないものの、センター退所理由別に路上に戻るまでの期間を調べると、

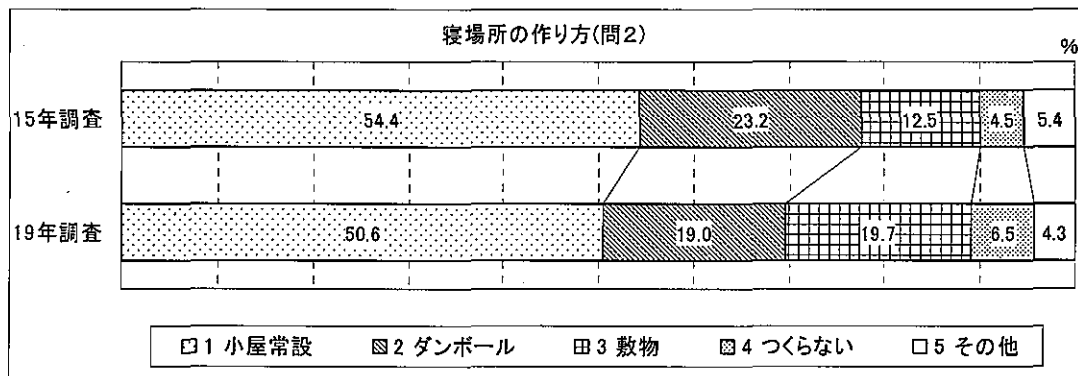
就労（アパート）が最も長く平均 15 ヶ月、次が就労（住み込み、寮）で 8 ヶ月となっている。生活保護による退所者の平均は 3 ヶ月である。もちろん、センターから就労、生活保護で退所した人々の中ではそれが持続して路上に戻っていないケースも考えられることから、このような再路上者のみの分析ではその成果は測ることはできない。しかし、生活保護を受けて退所した者のうち、再度路上に戻ってしまった者は比較的の短期間に脱落してしまう場合が多く、就労ではアパートを確保しての就労が住み込み・寮による就労よりも路上生活を脱却した期間が長いことが示唆される。

- ③ 一方で、センターから期限到来、自主・強制退所となった人々の平均月数は 5 ヶ月、2 ヶ月であり、彼らがすべて即路上に戻っているわけではない。なお、自主・強制退所者は、退所後 2 週間以内に路上に戻っているケースが多いが、期限到来者はそのような傾向はみられない。

#### 4. 路上生活者の生活状況

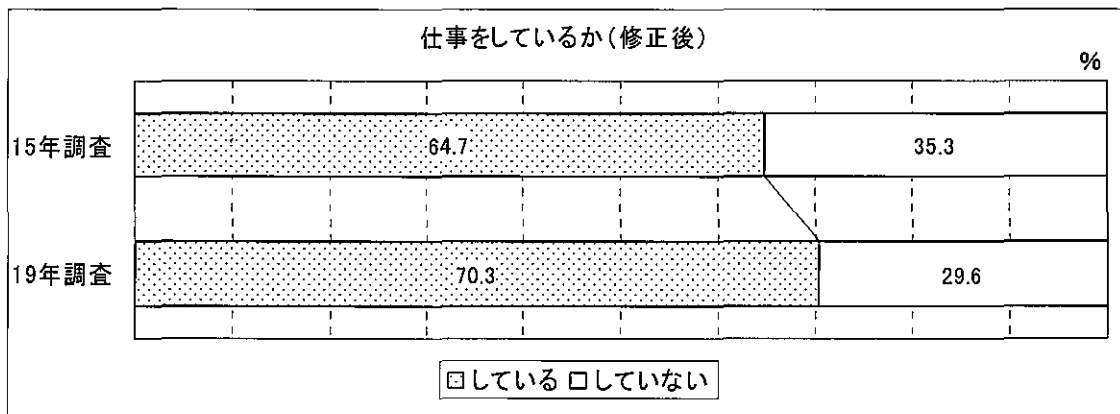
##### (1) 路上生活者をとりまく環境の変化

今回調査では路上生活者の高齢化・長期化が明らかになっている (p.1)。このことは、路上生活の質 (生活水準) にも影響しているはずである。高齢化は、身体の衰えとともに現金収入の減少、健康状態の悪化などをもたらし、生活水準を下げると考えられる。一方で、長期化の傾向は、路上生活の術に長けている人々の停留を意味し、生活水準が改善されている可能性もある。さらに、前回調査に比べ、今回調査では、「小屋常設」「段ボール」など半永久的な寝場所を確保している率が減っており、寝場所を「つくらない」率が増えていることから、路上生活者をとりまく環境が変化した可能性もある。



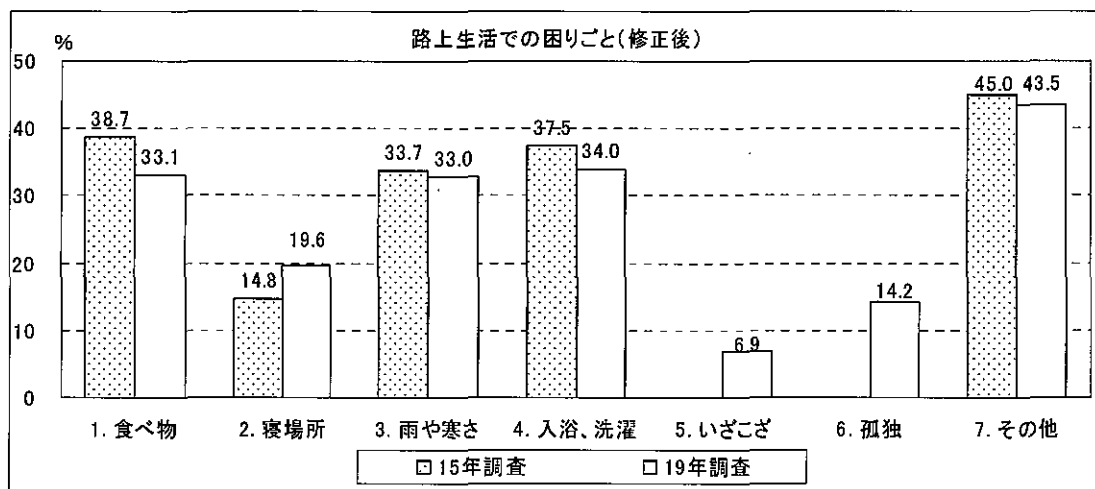
##### (2) 経済面

まず、経済面からみていくと、路上生活者の経済状況は改善の傾向を示している。「収入のある仕事」をもつ率は 64.7%から 70.3%に上昇。仕事からの収入も月収 3～5 万円、5～10 万円が増えており、3 万未満が減っている (p.7 の図 7 を参照のこと)。月収 10 万円としても決して路上生活を抜け出せる金額ではないが、路上生活を継続する上では経済状況は若干楽になっていると考えられる。



### (3) 路上生活

しかし、路上での生活水準に関する項目そのものをみると改善の傾向は見られない。路上生活で困っていること（問8）からみる実際の路上生活の状況は、さほど大きな差はみられない。「食べ物」「雨や寒さ」「入浴、洗濯」「その他」の困難を訴えるものは前回調査に比べ若干減少しているが、「寝場所」の困難を訴えるものは上昇している。これは、緊急一時施設が増えた一方で、路上生活を行える場所が少なくなっている可能性も否めない。



### (4) 健康

また、健康状況を見ると、本人の自覚症状が「なし」とした人は前回調査では 31.4%、今回調査では 21.8%と少なくなっており（問20）、逆に言うと、自覚症状がある人が多くなっている。自覚症状別の統計においても（問20）、ほぼすべての項目で、症状を訴える人の割合が多くなっていることから、全体的に、路上生活者の健康状態は悪化していると言える。前回調査よりも、今回調査のほうが、高齢者が多くなっていることから、当然の結果ではあるが、高齢・長期の路上生活者への早急な対策、路上生活者の健康を主目的としたアウトリーチが必要である。